

大学教育と日本留学試験(1)

— 学部留学生の大学生活における日本語運用上の困難 —

村上京子(留学生センター)

1. はじめに

試験開発において、その試験の目的を明確にし、何が測られるべきかを十分に検討することは非常に重要である。その意味で、日本留学試験が測ろうとする「アカデミック・ジャパニーズ」とは何か、その構成概念の検討は不可欠であろう。また、その概念を測るために「よい問題」を作ることには大事だが、その問題が「よい問題」か否かは、実際に実施した結果として得られるデータに基づいてしか判断できない。構成概念そのものも、データを通して確認される。

「日本語能力」という構成概念は身長や体重のような物理量と違い、直接測ることはできない。常に何らかのタスクを通じて間接的に測定される。実際に話したり、書いたりするタスクを用いればより測りたい実体である「日本語能力」に近いものは測れるだろうが、限られたタスクでは測定されたものは限定的であるし、こうした課題では測定の信頼性が常に問題となる。一度に多数の受験者を測ろうとすると、用いられるタスクはさらに限定されたものとなり、より間接的に「日本語能力」を推定せざるを得なくなる。このことが、思わぬ落とし穴となる。試験開発者には、内容的妥当性をもち、測定方法としてのタスクも現実性(authenticity)をもった「よい問題」に見えても、実際に受験者の解答行動を通して見えてくるものは、出題者の意図通りになるとは限らない。結果を通して検討していくことなしに、試験開発はありえない。

また、能力試験は、身長や体重のような物理量の測定と異なり、試験実施そのものが受験者や受験予備軍の学習者たちに多大な影響を与える。その試験準備のための学習が真に学習者に意味あるものなのか否かの検討は、開発に当たって十分に検討する必要がある。

本研究の目的は2点ある。

まず、第一は、大学入試選抜の道具としての日本留学試験の妥当性検討のために、実際に大学に入学した留学生の日本語に関する困難の分析から必要な能力を測っていたかどうかを検討することである。

第二の目的は、日本語能力試験から日本留学試験に切り替わったことにより、入学する学生にどのような変化があるかを調査し、試験の波及効果を調べることである。

1) 妥当性の検討

妥当性の検討に関しては、いくつかの方法がある。

日本の大学入試で使われる大学入試センター試験では、大学でどのような能力が必要かということよりも、むしろ高校までにどこまで到達しているかというアチーブメントを見ることに重点が置かれ、試験の妥当性に関しては、高校の学習シラバスをにらんだ内容的妥当性が問題とされる。いわゆる内容領域の適切性や代表性と呼ばれる出題範囲が高校で学習する内容から逸脱していないか、特定分野に偏っていないかを問題とするものである。これは、高校と大学という選抜試験の前後の教育が連続していることを前提としている。しかし、必ずしも高校でのアチーブメントが進学後の大学教育における成否を予測できないことは周知の通りである。

一方、自動車学校などの資格試験では、技術や知識を持っていないことによって起こる事故などの困難を予測して試験が作られる。したがって、実際の運転技術を見ることと、知識問題の両面から評価される。この試験の妥当性は、合格した人のその後の運転技術の問題や事故発生率などが、社会的に見て許容される範囲か否かで判断される。

留学生が大学に入学するにあたって、日本語に関して何を基準に選抜されるべきか。学習者の日本語学習履歴はさまざまであるから、アチーブメントは簡単には測れない。かといって、多くの受験者にパフォーマンス試験を実施することは不可能だ。そこで、日本語能力試験では、多くの教科書などで扱われている内容の中から、幅広く多数項目からなる識別力の高い問題を集めて、その学習者の実力 proficiency を推定しようとしてきた。しかし、実際の入学者を見てみると確かに語彙・文法など知識はよく覚えているが、授業の聞き取り、レポート作成など運用能力に欠けるものが多くいることが問題になり、選抜試験変更のきっかけになったと考える。そこで、運転免許試験のように、大学で適応して学業を遂行していくために何が必要なのかを見極めようとするのが第一の目的である。日本留学試験を受験して入学してきた学部留学生が、実際に大学教育で十分な日本語能力を身につけているかどうかを、導入以前の学生と比較するために、導入 2 年前からの学部留学生の日本語運用上の困難を調べる。

2) 波及効果の検討

波及効果とは、「テストの導入・使用が学習者や教師などに与える影響のことで、もしそのテストがなかったならば起こりえなかったさまざまなプラス・マイナスの効果をいう」(Samuel Messick 1996 Validity and washback in language testing, Language Testing 13-3, p.241, 村上訳)。時間的に前のものが後のものに影響するばかりでなく、将来の事柄(試験)がそれ以前の事柄(学習など)に影響する。これを波及効果(遡及効果)と呼ぶ。日本語能力試験は、大学予備教育機関のみならず多方面に多大な影響を与えた。この試験に向けてカリキュラム、教材、教室活動が考えられ、多くの模擬試験が作られた。日本語能力試験の波及効果は国内ばかりではなく、海外でも非常に大きい。それが日本留学試験の導入によって、どのような変化をもたらすのであろうか。導入の意図通りに、合格者は大学生活に必要な日本語運用能力を身につけて入学してくるのであろうか。その辺を見極めるためには導入の前から定点観測をする必要がある。本報告は導入前の 2 年間に名古屋大学に入学した学部留学生の実態調査である。今後、日本留学試験導入後も引き続き同様の調査を続ける予定である。

<調査報告の構成>

名古屋大学の学部留学生を対象として、入学直後、授業開始 1 ヶ月、前期試験終了後、および 1 年後に質問紙調査を行い、大学生活における日本語使用にどのような困難があるか調べた。また、面接調査により、具体的な困難場面やその対処の仕方、今後の課題などについて尋ねた。

2 節では、対象者のプロフィール、および比較する場合のグループ分けについてまず説明する。次に入学当初の学習者のニーズ調査の結果を報告する。3 節では半年後の前期授業期間終了時に、対象者がどのくらいの授業に出席し、授業中どんな困難があったか、試験やレポートでの困難の理由は何かなどを調べ、報告する。時間の経過で授業中の困難がどのように変化するかを知るために、1 年生と 2 年生で場面ごとの困難度を比較したものを、4 節で報告し、質問紙調査を裏づけるために行った面接調査についてもここで述べる。最後に 5 節で、ここまでの調査結果をまとめ、考察する。

2. 入学直後調査

2-1 調査の目的・概要

学習者の入学直後の様子を把握するために、授業開始前に、入学前の日本語学習履歴や日本語使用に関して難しい点、日本語授業で特に学習したい事柄を質問紙調査する。結果は、日本語の授業計画の参考にするとともに、その後の学習ニーズ等の変化を見ていくものとする。ニーズの変化は、3節の調査結果と合わせて考察で扱う。

2-2 対象者

対象者は、2001年度入学学部留学生24名、2002年度入学学部留学生37名 計61名で、留学の種類および国籍は表1に示す。国費留学生のうち、日韓理工系学部留学生は「日韓」として、「国費」とは別に分類した。これは、韓国母語話者のみで、他の国費留学生と日本語学習の容易さという点で差があることと、予備教育が他の国費留学生や政府派遣留学生とまったく異なっているために、同じ国費留学生ではあるが、「国費」に含めないほうが良いと判断したためである。

表2は所属学部で分類した。文学部・経済学部・法学部・情報文化学部(情文)の中の社会システム情報学科は文系学部、工学部・理学部・農学部・医学部・情文の自然情報学科は理系学部としてまとめた。その結果、文系学部14名、理系学部47名になった。

本報告では、文系・理系の比較および、国費・私費の比較を必要に応じて行っていく。この場合の「国費」には政府派遣留学生を含める。「日韓」と高校から日本留学をしている2名のタイ政府派遣留学生は断りがない限り、「私費」に含める。これは入学時の診断試験の結果、「私費」と差が見られなかったことによる。

2-3 結果

学習履歴は、国費留学生は日本で1年間、マレーシア政府派遣留学生は自国で2年間の予備教育を受けている。タイ政府派遣留学生の中には高校から日本に留学しているものが2名含まれるが、それ以外は1年から1年半日本で日本語学校に通っており、中級教科書終了レベルである。語彙・漢字等に困難があるとしている。日韓留学生は韓国で半年、名古屋大学で半年間の日本語予備教育を受けており、入学前に学部の授業を受講した経験をもつ。私費留学生の学習履歴は多様で、すでに自国で大学を卒業したのものも含まれ、日本語も自国で3年程度勉強してきたものが半数近くいる。多くは1年から2年間日本で日本語学校に通い、日本語能力試験1級受験に備えた

表1. 学部留学生の種類と国籍

種類	国籍	人数
国費	マレーシア	2
	モロッコ	2
	ベトナム	2
	タイ	1
	インドネシア	1
	オーストラリア	1
	カザフスタン	1
	タンザニア	1
	フィリピン	1
	ラオス	1
政府派遣	タイ	4
	マレーシア	9
日韓	韓国	10
私費	中国	24
	ベトナム	1
合計		61

表2 所属学部

所属学部	人数
工学	38
文学	6
経済	3
法学	3
理学	3
農学	3
情文	3
医学部	2
計	61

表3 入学直後のニーズ

勉強したいこと	人数
会話	25
レポートの書き方	16
文化・歴史	6
聞き取り	5
敬語	4
若者言葉・流行語	3
語彙・文法	3
その他	11

と答えている。

「これから日本語の授業で特に勉強したいこと」の欄には、表 3 のような回答(複数回答可)があった。特に、自然に話せるようになりたい、もっと滑らかに話したい、日常会話を勉強したいという「会話」の希望が多く寄せられている。また、レポートなどの書きことばの学習をという声も多かった。そのほか、ニュースの聞き取りなど、日常生活での困難からの希望が多かった。まだ授業が開始していないことから、大学生活での日本語の困難は予想がつかず、これまであまり学習してこなかったという理由から、勉強したいことがらがあげられているようである。

授業開始後1か月の時点で行った質問紙調査の結果は、4節の「1年後の変化」で扱うことにし、次に半年後の前期試験が終わった後に調べた調査について報告する。

3. 前期終了時調査

3-1 調査の目的・概要

入学後半年の間に大学生活の中で遭遇した日本語に関する困難点を調査し、入学前に身につけておくべき日本語能力および学部入学後の日本語教育に関する基礎資料を収集する。

対象者は2節「入学直後調査」と同じ 2001 年度入学学部留学生 24 名、2002 年度入学学部留学生 37 名 計 61 名である。

実施時期は、2001 年 9 月および 2002 年 9 月で、ともに学部入学後、はじめての定期試験が終了した直後に質問紙による調査(資料1参照)を行った。

3-2 結果

3-2-1 授業中の困難

1年前期に登録した授業数、そのうち試験のあった科目数、レポートの数は表4の通りであった。一般に、理系の学生のほうが多くの授業科目を取っている。1コマ 90 分の授業を毎日 3 コマから4 コマ受けていることになる。また、入学後半年足らずの間に平均7本のレポートを書いている(詳しくは資料3, 4, 5参照)。

表4 1年前期に受講した科目数とその評価法(61人)

	人数	授業科目	試験科目	レポート数
国費理系	22	17.91	7.48	8.95
国費文系	4	15.50	8.50	5.67
日韓	10	16.70	8.00	5.44
私費理系	15	16.71	9.07	6.71
私費文系	10	14.10	6.80	6.20
平均		16.63	7.90	7.19

国費・理系学生が、難しかった授業としてあげているもののうち、32 件中 18 件が教養教育科目の基本主題科目「世界と日本」「西洋文化の受容と変容」など歴史や文化に関するもので、5 件が化学工学などの専門科目、数学・化学などの理系基礎科目が8件であった。難しい授業としてあげられているものは、教科書やプリントを使わず、教師が一方向的に話す講義だとして、その難しい理由は「先生の話し方が早い」・「黒板の字が読み取りにくい」・「専門の言葉がわからない」が中心であった。

国費・文系が難しかった授業として、専門科目の講義を4人中3人があげており、その他基礎セミナーやスポーツ医学入門があげられた。難しかった理由は「専門の言葉がわからない」、「基礎知

識がない」などであった。

日韓(工学部のみ)が難しかった授業は、基本主題科目「生涯健康とスポーツ」「現代思想の展開」6件のほか、化学・物理などの科目3件であった。理由は、上の国費の学生のもものと共通するが講義中「英語が多く出てくるが知っている名前でも日本語の発音なので内容が聞きとれない」というものもあった。

私費・理系は、やはり基礎主題科目5件、化学・数学5件、コンピュータ2件、基礎セミナー2件、専門科目2件があげられていた。日本語そのものよりも「内容が難しい」「知識不足」という理由で困難としている学生が多い。

私費・文系は、専門科目の「日本の憲法」、「社会契約論」「論理学」などがほとんどであった。6人が「専門の言葉がわからない」として、国費の文系の学生と共通している。

以上、国費・私費、理系・文系別に授業における困難さを見てき

たが、全体として、理由の主なもの「専門用語がわからない」が共通しており、「先生の話し方が早い」「ノートがとれない」「黒板の字が読み取りにくい」の他、「知識不足」「内容が難」「先生の方言」「板書がない」などが多くみられた。また、和訳中心の英語の授業が難しいという意見が多くみられた。理解はできても、日本語にうまく訳せない、日本語の語彙がわからないというものであった。

3-2-2 教科書

授業で使った教科書について調べた結果、記入のあった55名の回答者が49の教科書をあげている。そのうち、難しかった教科書で最も多かったのは、化学の11 表5 教科書に関する困難件で、ついで歴史、数学や専門科目であった。特に難しくなかったと答えているのは、5名で、全員私費の中国語母語話者の学生であった。

難しかった理由については、化学・生物・情報の教科書は、カタカナ語が多く、意味がつかみにくかったという答えが数多く見られた。歴史に関しては、固有名詞が多く、背景知識の不足から理解が困難であったとしている。全般に、内容の難しさや専門用語の知識不足が大きな原因になっている。特に、非漢字圏の学生にとっては、1ページを読むのに時間がかかり、とても授業に間に合うように読むことはできないという訴えが多く見られた。

難しかった教科書	49
化学	11
歴史	5
数学	5
専門科目	5
情報	3
物理	2
生物	2
論理学	2
その他人文科学	14
特に難しくなかった	5

3-2-3 テスト

テストで難しかったとしてあげられたものは、化学の試験6人、歴史:4人、その他10人で、答案を書くのが難しかった理由の主なもの、以下の通りであった。

- ・ 説明せよと言われても漢字や単語もわからず、知っていてもうまく説明できない
- ・ わかっている言葉で表現するのが難しい
- ・ 日本語を書くのに時間がかかり、試験時間がなくなってしまう
- ・ 授業のときちゃんとメモしなかったから、言葉がわからない
- ・ たくさん書けなかった。なぜなら、講義があまりわからなかったから。
- ・ 知識がよく身につけていない

特に、説明することが難しいと答えたものが多く、アイデアを文章化できないもどかしさを訴えて

いる。また、授業中の理解の不足や教科書を読みこなせないため、テストの準備が十分でなかったとしているものも多かったです。

3-2-4 レポート

前期中に書いたレポート数は、平均 7.2 で、最も少ない学生が1つ、多い学生は毎時間提出と

表6 難しかったレポート

件数	科目	例	理由
11	基礎セミナー	「心理学」自由研究 20 枚のレポート 無声映画を見た後、映画分析のレポート	研究がある・時間がかかる・
11	歴史	「西洋の社会と歴史」西洋文化の受容と 変容 科学史	本の内容をまとめられなかった
6	日本語	日本語は乱れているか	量が多い
3	環境問題		科学的な文を書くのが難しい
3	健康		専門の言葉がよく理解できない
3	実験レポート	化学	毎回小レポートを書かなければいけなかった
2	情報科学		専門的な知識(コンピュータ)が少なく、いろいろな本を調べてたいへんだった
	その他	英語の和訳・源氏物語・契約理論・本を 読んで書評を書く・映画史・フランスの民 俗学・Blues の歌詞分析・手と脳・自由貿 易協定が日本経済および世界経済に与 える影響	英語を日本語に訳すのは、日本語を英語 にするより難しい・古い漢字の読み方と意味 がわからない・毎週英語の論文を和訳して 提出するのが難。英語も母語ではないから・ アイデアを出すのが難・いろいろな本や資 料を読まなくてはいけなかった

いうものだった。レポートの量や課題、形式はさまざまであったが、全員がレポート作成は難しかったことを訴えている。

レポート作成が困難な主な理由としては、以下の項目があげられている。

- ・ 言いたいことを適切に書けない
- ・ 授業中ディスカッションしたこともよくわからなかったから、レポートを書くのはたいへん
- ・ 授業内容があまりわからなかったし、教科書も理解できなかったから
- ・ 自分が考えていることを表現するのが難しかった。それは、たぶん知っている言葉の数がまだ少ないからだと思う。
- ・ 専門の言葉がよく理解できない
- ・ 専門の内容がよくわからない
- ・ たくさん読めない漢字があるから、レポートを書くとき、時間がかかる
- ・ 難しい日本語できれいに書きたいのに、あまりうまくできない

以上から、入学後半年の間に多くの授業を受講し、講義の聞き取りや発表などに苦勞している様子が伺われた。1 年前期に受講した科目数は、平均約 17 科目で理系学生の方が文系学生よりも多くの授業を取っている。そのうち約半数が試験科目、残りの半数がレポートを課されている。試験の答案にせよ、レポートにせよ、考えをまとめて書く作業は、ほとんどの学生にとって困難で、その理由としては、授業内容がわからない、日本語で表現することが難しいことをあげている。授業内容は、講義が聞き取れないことや、教科書が難しいことなどが理解の困難に結びついているが、その困難の背景には、専門用語などの語彙や知識の不足があると考えている。

4. 1年後の変化

4-1 調査の目的・概要

1 年生と 2 年生の比較を行うために、授業開始 1 か月後の時点で、質問紙調査(資料2参照)により、場面毎の困難度を 5 段階で評定してもらった。また、具体的に困難に遭遇した時のようすや対処法、本語授業に対する要望を個別面接により調査する。

対象者は、2 節、3 節と同じ 2001 年度入学学部留学生 21 名、2002 年度入学学部留学生 37 名、計 58 名で、2002 年 5 月上旬に一斉に質問紙調査した。その後、2002 年 7、8 月の夏休み期間中、個別面接を行った。2 節 3 節の調査時より、質問紙調査では 3 名、面接調査では 5 名欠席のため少なくなっている。

4-2 結果

困難度を調べるために設定した場面は以下の 9 場面である。ただし、1 年生については、「レポートを日本語で書く」「レポーターで発表をする」の項目に該当する活動がまだ行われていないため、集計から除いた。

- ・ 友だちと雑談する
- ・ 先生の部屋でていねいに話す
- ・ 日本語で手紙を書く
- ・ 事務に行って話す
- ・ 基本主題科目などの講義を聞く
- ・ 基礎セミナーなどで意見を言う
- ・ レポートを日本語で書く
- ・ レジューメを書く・読む
- ・ 教科書を読む
- ・ レポーターで発表をする

図1から、1 年(黒)に比べ、2 年(白)の困難度が下がっており、特に「講義を聞く」にその差が顕著であることがわかる。「教科書を読む」は国費 1 年で困難度が非常に高いが、2 年になると他のグループと差がなくなる。しかし、2 年になっても、「発表をする」や「ゼミで意見を言う」の困難度は依然高いことがわかる。

表7 授業開始1ヵ月後の困難度(上段:1年生、下段:2年生)

5:非常に困る 4:少し困る 3:どちらともいえない 2:あまり困らない 1:全然困らない

1年		人数	友人	先生	事務	講義	ゼミ	レジメ	教科書
	国費	14	1.71	3.15	2.71	4.50	4.29	3.64	3.86
文系	2	1.00	3.00	2.00	5.00	4.50	4.00	4.50	
理系	12	1.83	3.18	2.83	4.42	4.25	3.56	3.75	
日韓	5	1.00	3.00	2.00	3.20	3.60	2.60	2.60	
私費	18	1.71	3.13	2.76	3.88	4.12	2.47	2.47	
文系	5	2.00	2.00	2.50	3.50	4.00	2.25	2.00	
理系	13	1.62	3.42	2.85	4.00	4.15	2.54	2.62	
計	37	1.61	3.12	2.64	4.03	4.11	2.88	3.03	

2年		友人	先生	事務	講義	ゼミ	レジメ	教科書	レポート	発表
	国費	7	1.14	2.43	2.71	2.71	3.43	2.57	2.43	2.57
文系	2	1.00	2.50	1.00	2.00	4.00	3.00	2.00	3.00	5.00
理系	5	1.20	2.40	3.40	3.00	3.20	2.40	2.60	2.40	3.20
日韓	4	1.00	3.50	2.25	2.00	3.00	2.25	2.25	2.75	3.75
私費	10	1.00	2.90	2.60	2.70	3.40	2.20	1.80	3.00	3.10
文系	5	1.00	2.80	3.00	3.20	3.20	2.00	1.80	3.00	2.60
理系	5	1.00	3.00	2.20	2.20	3.60	2.40	1.80	3.00	3.60
計	21	1.05	2.86	2.57	2.57	3.33	2.33	2.10	2.81	3.35

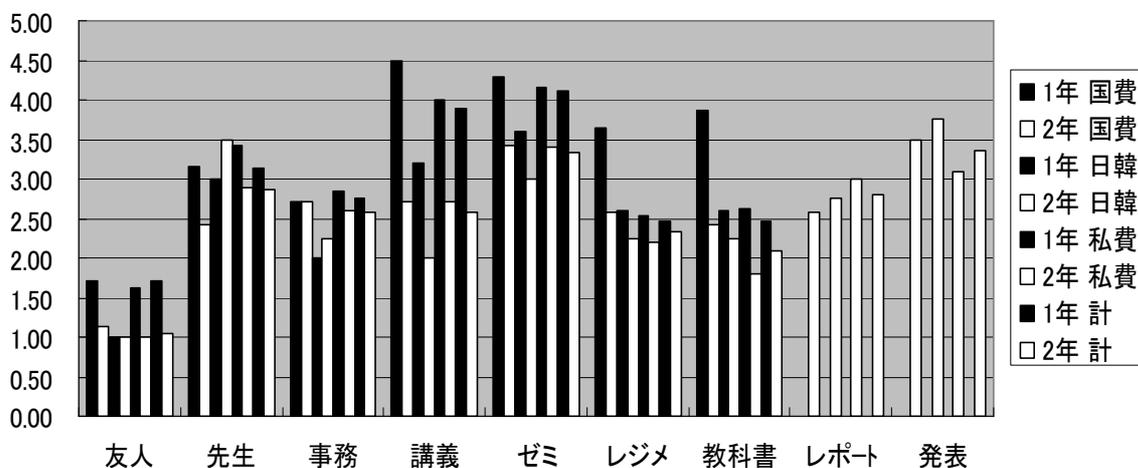


図1 授業開始1ヵ月後の困難度

次に、「日本語で困ったとき、どうしたか」を聞いたところ、「辞書を引く」17名、「人に聞く」17名、「英語で言う・漢字で書くなど他の方法で伝える」12名などの方法で対処しているが、中に「黙ってしまう」と答えた学生も2名含まれる。

「誰が助けてくれたか」に対して、74%の学生は、クラスメイトやチューター、同じ国の先輩などに相談している。しかし、26%は「いない」または無記入で、相談しないと答えている。その理由を面接調査で、詳しく聞いたところ「恥ずかしいから」「自分の問題だから」と答えた学生が多く見られた。また、1年生の私費留学生在が半数以上が「聞く相手がいない」と答えており、日本語能力の問題ではなく、これまで「書く・読む」を中心に学習してきた経験などが影響していそうである。

表8 日本語で困ったとき助けてくれる人(複数回答)

1年	国費	日本人の友人	8	2年	国費	日本人の友人	5	
		同じ国の先輩・友人	5			同じ国の先輩・友人	3	
		無答	2			先生	1	
						無答	0	
	日韓	日本人の友人	2	日韓	日本人の友人	5		
		同じ国の先輩・友人	2			同じ国の先輩・友人	0	
		無答	1			無答	0	
	私費	日本人の友人	5	私費	日本人の友人	4		
		同じ国の先輩・友人	4			同じ国の先輩・友人	4	
		いない	7			いない	2	
		無答	2			先生	1	
						無答	0	

その他、今後もっと日本語の授業で勉強したいことをあげてもらったところ、表9のようになった。学部生対象の日本語の授業ですで行われている読解やその要約、意見文の書き方、口頭発表等の内容については、あがっていない。授業であまり扱われていない「日常の自然な会話」「敬語」「若者言葉」などがさらに勉強したい項目になっている。これはふだん日本人の友人と話していて、自分の意図を十分に伝えられなかった、話についていけないなどの経験に基づいた要求で、ネイティブスピーカーにできるだけ近づきたいからという目標をあげているものがいた。入学直後と比較すると、専門用語や語彙を増やしたい、口頭発表等の練習がしたいという要求が増えている。

表9 日本語授業への要求

1年	国費	会話	4	2年	国費	口頭発表・意見を言う	2	
		専門的な言葉	3			丁寧な話し方・会話	2	
		敬語	2			レポートの書き方	1	
		若者言葉	2			言葉を増やす	1	
		レポートの書き方	2			その他	2	
		その他	3					
	日韓	会話	1	日韓	敬語	2		
		レポートの書き方	1			発表	1	
		若者言葉	1			その他	2	
		語彙	1	私費	丁寧な話し方・会話	6		
		無答	1			口頭発表・意見を言う	3	
						その他	4	
	私費	会話	7					
		レポートの書き方	4					
		スピーチ	4					
		聴解	3					
		敬語	1					
		その他	3					

4-3 質問紙調査と面接のまとめ

授業が開始後1ヶ月経った時点での、1年生と2年生を比較したところ、まだ1年生はレポートや発表などをほとんど経験していないため、全般にさほど困難は高くないものの、「講義を聞く」「ゼミで意見を言う」の困難度が高かった。2年生になると「講義を聞く」の困難はかなり克服されることがわかった。しかし、「ゼミで意見をいう」では2年になっても「発表する」と同様、かなり困難であることがわかる。面接により、具体的な話を聞くと、事前に準備のできるレポートや発表はなんとかインターネットなどで調べてこなすが、発表の後の質疑や先生からの質問には答えられない。自分の理解が不十分なこともあるが、その場で考えながら説明することは難しい、という答えが多かった。

文字・語彙に問題を抱える国費留学生は、1 年生では「教科書を読む」に困難を訴えているが、2 年生ではかなり解消されてくる。しかし、要領を覚え必要な箇所だけ見たり、友人にノートを見せてもらったりするから教科書を読まなくても大丈夫と答えている学生が多いことから、必ずしも 2 年になって読解力が増し十分になったからだとはいえないことがわかる。

レポートに関しては、2 年でも困難だという声が大きかった反面、面接では「今はインターネットがあるから便利になった」という意見が多数聞かれた。詳しく聞くと、自分だけで長文のレポートを仕上げるのは困難だが、インターネットには課題の情報や課題に近い意見文が載っているため、それを参考にすれば比較的楽に仕上げるができる、というものであった。しかし、多くの情報の中から、適切なものを選び出したり、自分の意見と結びつけたりするのに苦労している。うまく引用したり、要約したりするのは、まだやはり困難だという点ではみな共通していた。

その他、面接により具体的な場面についての困難やその対処法を聞いたところ、友人との話の輪に入っていけないことや、友人ができないことをあげている学生が多くみられた。特に 1 年生に顕著であった。授業などでわからないことがあっても、人に聞けないと答えた学習者の割合が 26%と多く、その理由も「恥ずかしいから」「自分で努力するしかない」としている。中国語圏の学生には、2 年になっても、わからないところを聞ける人は「いない」とする学生が数人いる。

大学ができる支援策として「同じクラスメイトをチューターにしてほしい」という意見が数多くあった。大学は、学部留学生に入学後半年間チューターを雇っているが、チューターの資格として大学院以上としているため、個々の授業内容については聞くことができない。また、1 週間に 1 回程度の頻度で会うケースがほとんどで、学生が困難に遭遇していてもその場で援助してもらえない。一緒に授業を取っている日本人学生に相談しやすいような制度がほしいと、面接において、ほとんどの学生が訴えていた。

5. 結論・考察

入学当初は、講義の聞き取りや基礎セミナーでのディスカッションなどにおいて、全員の困難度が高い。1 年前期の間に平均 17 コマの授業を取り、レポートを平均 7 回提出している。試験科目では、短時間に答えをまとめて日本語で書くことが難しかったという回答が多く寄せられた。1 年後には授業の聞き取りにはさほど困難を感じなくなるが、依然として口頭発表やディスカッションでの困難度は高い。レポート作成には内容の難しさのほか、専門用語の不足や論理的な文章が書けないといった理由で困難を訴えており、その対処法として多くがインターネットから関連の文章を探すとしている。

今調査の対象者のうち、私費留学生は日本能力試験を受験して、入学してきた学生である。多くは本国で 1 年から3年程度日本語を勉強した後渡日し、日本語学校等で受験準備をしてきた。日本語能力試験 1 級の出題基準に掲げられた文字・語彙・文法項目を覚え、過去の問題や類似問題を数多く練習してきたと言う。ある学習者の辞書は 1 級語彙・2 級語彙と色分けがされていた。それだけ学習者の入学以前の日本語学習の仕方が日本語能力試験に縛られていたことが伺える。国費や政府派遣留学生は日本語能力試験の受験は必要なかったものの、到達度を測る基準として日本語能力試験の何級というレベル判定が用いられることが多かった。

2003 年度入学者から日本語能力試験に代わって日本留学試験が用いられるようになるが、学習者の学習の仕方、習得してくる知識や技能はどのように変わるのであろうか。これまで試験の多くの割合を占めていた文字・語彙・文法などの知識を問う問題がなくなったことが、また新たに記述問

題が加わったことが、入学してくる留学生の大学での生活にどのような影響があるのだろうか。この度の観察で注目していくポイントは以下の3点である。

1) 講義を聞いたり、教科書や資料を読んだりする活動のなかで、語彙の不足をこれまでも多くの学生が指摘してきたが、語彙知識を直接問う試験がなくなったことが、より事態を困難にするのか、もしくはさほど大きな変化はないのか。これまでの私費留学生と国費・政府派遣留学生の比較では、単に日本語能力試験受験経験の有無だけではなく、学習者が漢字圏の出身か否かとも関連しており、結論づけるのが難しかった。それが、同じ母語学習者が異なる試験を受験して入学してくるわけであるから、その変化に注目する必要がある。

2) 聴解・聴読解問題が全体に占める割合が多くなったことにより、「聞く」技能により多くの学習時間が割かれたことが予想される。講義が聞き取れない、事務や友人の話についていけないなどの困難は軽減されるのか。

3) 記述問題の導入により、書く技能が予備教育段階でも学習項目に入ったと考えられる。これが入学後の「レポートを書く」ことの困難解消にどのように貢献するか。入学してすぐ多くのレポートが課せられるが、それに学習者はどのように対応するか。

これまで大学院レベルの研究留学生に関する日本語の実態調査(因他：1998, 村上：1998)はいくつか行われてきたが、学部留学生に関しては数がきわめて少ない(札幌他：2003)。多くの国立大学の留学生センターで行われている日本語研修コースは、大学院留学生のための日本語予備教育コースであり、そのカリキュラム評価や教育成果の評価、目標言語調査のための研究報告は多い。そこでは、まったく日本語を学習したことがない学習者に、短期間で日本での研究生生活に困らない程度の日本語を身につけさせることが目標とされている。しかし、学部に入學する留学生は日本人学生と区別なく単位を取得していただくの高度な日本語能力を入学前に習得してくることが前提で、彼らの日本語に関して問題にされることはほとんどなかったと思われる。

また、多くの国立大学では留学生のうち大学院留学生の割合が高く、学部留学生は日本人学部学生の中にまぎれて目立ちにくいことも、問題にされなかった理由の1つだと考えられる。名古屋大学の場合、各学年 10 数名から 30 名程度の学生が各学部学科に散在しているため、教室の中に留学生がいるかどうか知らない教官がほとんどである。さらに、学部留学生は、今回の調査でも明らかになったように、毎週多くの授業を受講し、あまり周囲との情報交換をしていない。私費留学生はアルバイトにも多くの時間を割いていることを考えると、毎日を忙しく生活しており、多少問題があっても学生自身が声を上げることはほとんどなかった。このため、彼らの問題が表面化してこなかったと考えられる。

しかし、日本人学生並みにと期待されながらも、実際は多くの問題があり、特に入学当初は講義がわからない、自分の考えをまとめて話せない、レポートが書けないといった悩みは国費留学生に限らず、私費留学生にも共通していることがわかった。日本語能力試験 1 級をかなり高得点で合格し、大学独自の試験に合格してきた私費留学生であるが、教科書やレジュメなどの困難度は低いものの、講義を聴く、ディスカッションをする、レポートを書くなどでは、国費留学生とほとんど変わらない。むしろ、周囲の友人等に援助を求めることが難しいことがわかった。

以上は、2001 年度、2002 年度に名古屋大学に入學した学部留学生の実態調査であるが、ここに本調査で明らかになった学部留学生が習得していると大学での学習において、困難が軽減すると考えられる事柄をあげておく。

1) 人間関係を形成する能力

わからないことは気楽に聞け、必要な情報を得られるように、周囲の人とよい関係を結んでいけるようなコミュニケーション能力。

2) 講義でよく使われる語彙・表現

専門用語やキーワードなどは、テキストや板書、レジュメ等にも書かれていることが多いが、挿入・引用等講義の中で多用される表現に戸惑う学習者が多い。

3) 文章を書く力

入学後すぐに授業へのコメントや小レポートが課せられることが多い。短時間に考えを文章にできないという悩みはすべての学生に共通していた。正しい答を選ぶことに慣れている学習者にとって、産出課題が苦手であることは当然かもしれない。記述問題の導入がどのような効果をもつかは、大変興味深い。

4) カタカナ語

入学後 1,2 年間の初年時教育において頻出するカタカナ語には、多くの留学生が困難を感じている。母国での日本語教育では限られたカタカナ語彙にしか接することがなく、元になった英語等を推測することが難しい。

5) 批判的思考能力

理解するだけでなく、コメントする能力、問題を見つける能力が乏しい。インターネットなどの情報を利用することが大学生活の中では多いが、何を引用するか、ただ引用するだけでなくそれに対し自分の意見を述べることに不慣れな学生が多い。

上に掲げたものは、日本語の学習に限られたことだけではないが、大学入学に先立つ日本語予備教育で取り上げ得る事柄もあるように思う。読解の際も、理解を中心に行うだけではなく、意見を言う、考えを書くといった活動は是非取り上げてほしい。選択式の客観テスト問題で、どこまで上のような能力を測れるかは確かに問題であろう。問題の形式が準備教育を規定するという波及効果は存在する。かといって、口頭試験のような時間やコストのかかる形式を取り入れることには限界がある。測ることのできるものと、容易には測ることができないものを見極め、直接測ることのできないものを、効率的に推測するための道具としての試験作りは大事だが、これに徹すると日本語能力試験のように、細切れの知識量から運用能力を推定するようなことになりかねない。前にも書いたように、学習者にとって意味のある、将来実際の場で使うであろう authentic な課題である必要がある。大学での勉学生活に必要な日本語能力を測定し、そのテストへの準備教育が将来の活動に意義のあるものをして学習者自身にも納得できるものとして認められるかが重要だ。波及効果を見据えた試験のあり方を模索していく必要がある。

本報告は、2つの目的を掲げて行われたものであるが、結果は 2003 年度以降に入学してくる学部私費留学生が大学生活の中で十分な日本語能力を身につけ、適応的に勉学していけるか、どんな変化が見られたかを検討していく中で、得られるはずである。調査を引き続き続けていきたい。

注

本論文は村上京子（2003）「学部留学生の大学生活における日本語運用上の困難と課題」名古屋大学留学生センター紀要を加筆・修正したものである。そこでは、学部留学生の勉学生活を支援していくために求められる大学としての対策を中心にまとめた。

参考文献

- 因 京子他（1998）「大学院レベルの日本語予備教育に求められるもの ―日本語の到達度は何を示すのか―」『日本語教育』99号 120-130
- 西原鈴子（2001）「留学生に対する日本語教育の現状と課題」『留学交流』vol.13, no.3
- 二通信子（1996）「レポート指導に関するアンケート調査の報告」北海学園大学学園論集 第86号
- 二通信子（2001）「アカデミック・ライティング教育の課題」北海学園大学学園論集 第110号
- 札幌野寛子・辻村まち子（2003）「大学生に期待される日本語能力に関する調査について」『日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成 報告書』国立国語研究所
- 村上京子（1998）「質問紙調査報告」『研究留学生にみられる日本語発話能力の変化と日本語使用環境に関する基礎的研究』平成7-9年度科学研究補助金基盤研究（B）（2）研究成果報告書 1-21

資料 1

学部留学生実態調査

氏名 _____

前期の授業（日本語の授業以外）・試験やレポートを通して、自分の日本語使用がまだ不十分だと思ったことはありますか。どんな点が難しかったのか、もっとどんなことを日本語の授業の中で勉強したいのか知りたいと思います。遠慮せず書いてください。参考にしながらこれからの授業を進めたいと思います。

1. 前期いくつ授業をとりましたか。 () コマ
2. 授業中、ノートをとったり、理解したりするのが難しかった授業はどんな科目ですか。
3. それは、なにが原因だと思いますか。
(例：先生の話し方が早い、黒板の字が読み取りにくい、専門のことばがわからない・・・)
4. 教科書や参考図書を読むのが難しかったのはどんな科目ですか。
5. 試験を受けたのは何科目ですか。 () 科目
6. その中で試験の答案を書く際困ったのは何ですか。それはどうしてですか。
7. レポートはいくつ書きましたか。 () 科目
8. レポートを書くのに苦労した科目とテーマは何ですか。どうしてですか。
9. そのほか授業で苦労したことはどんなことですか。
10. 学部に入る前にもっと勉強しておけばよかったと思うことがあれば書いてください。
11. 日本語の授業でとくに勉強したいことは何ですか。

資料 2

この1か月を振り返って、授業や日常生活のなかで、どんなとき、日本語でどのように困ったか思い出してみてください。以下の場面でどうでしたか。()に下の数字を入れてください。困った経験をもつ人は具体的に_____に書いてください。

5:非常に困る 4:少し困る 3:どちらともいえない 2:あまり困らない 1:全然困らない

- () 友だちと雑談する _____
- () 先生の部屋でていねいに話す _____
- () 日本語で手紙を書く _____
- () 事務に行って話す _____
- () 基本主題科目などの講義を聞く _____
- () 基礎セミナーなどで意見を言う _____
- () レポートを日本語で書く _____
- () レジューメを書く・読む _____
- () 教科書を読む _____
- () レポーターで発表をする _____
- () しらない人と電話で話す _____
- () その他 _____

2. 日本語で困ったとき、どうしましたか。

3. 誰が助けてくれましたか。(役に立つ人:例 チューター、同じ国の先輩・・・)

4. 日本語の授業でもっと勉強したいことは何ですか。

5. 日本語の授業の数はどのくらいがいいと思いますか。

1 年前期: _____ コマ、1 年後期: _____ コマ、2 年前期: _____ コマ、2 年後期: _____ コマ

3 年以降: _____ コマ 全体で: _____ コマ (1 コマは 90 分授業)

国費留学生の難しかった授業・教科書

身分	国籍	性	所属	コマ	難しかった授業	理由	難しかった教科書
1 国費	オーストラリア	男	経	18	近現代史	専門の言葉がわからない	参考図書
2 国費	カザフスタン	男	経	14	スポーツ医学入門、基礎セミナー：金融と法律、専門科目の講義	科目より先生によって授業の理解度がちがう。簡潔に面白く説明してくれる科目は完全に理解ができる。問題は黒板の字。	専門科目。新聞の記事
3 国費	タイ	女	法	15	専門科目	先生の話し方が早い・専門の言葉がわからない・板書が少ない	国際法入門・フランスの民俗学(セミナー)
4 国費	タイ	女	法	15	専門科目や基礎セミナー	先生の話し方が早くて、授業の内容もわからない、高校からいないので、基礎知識がない	専門科目を読むのが難しかった
1 国費	インドネシア	女	理	15	教科書やプリントを使わない科目：世界と日本、西洋の社会と歴史、科学と情報	専門の言葉、先生がパソコンを使ったとき、授業のスピードが早くてノートを取りにくい、黒板の字が読み取りにくい	化学、世界と日本：西洋の社会と歴史
2 国費	マレーシア	女	農	19	専門	黒板の字が読み取りにくい、専門の言葉がわからない	多くの漢字の読み方がわからないので、意味や読み方を調べるのに時間がかかる。1ページを読むのが遅い
3 国費	タイ	女	工	18	世界と日本、科学と情報、教科書を使わない科目	先生の話し方が早い、黒板をあまり使わない。専門の言葉がわからない	数学以外の科目
4 国費	タンザニア	男	工	18	基本主題科目：日本と世界	ノートをとったり、理解するのが難。それは専門科目ではないから。政治的な言葉が多く使われていた。	基礎セミナーの教科書
5 国費	フィリピン	男	工	24	数学基礎Ⅱ・専門科目	先生の漢字の書き方が難しく早い・先生の教え方が他の日本人にも難	アルブリースのハンドアウト(数学)
6 国費	ベトナム	男	工	15	世界と日本(源氏物語)、セミナー	専門の言葉がわからない	セミナー、世界と日本
7 国費	ベトナム	男	工	14	ビデオを見て、ビデオの内容情報をとること	社会的な言葉が多く出てきて、新しいことばが多い	文系科目：歴史や経済、新聞
8 国費	マレーシア	女	工	20	専門科目	先生の話し方が早すぎるとはいえないが、使う言葉の意味がわからない	専門科目
9 国費	マレーシア	女	工	20	世界と日本：西洋の社会と歴史	授業内容がスコットランドの歴史と文化を勉強するのだが、歴史的な言葉が多く出てきた。新聞記事は講義の資料としてよく使われていた。漢字が多く、読めないから、講義内容は理	基礎セミナー(自然科学と技術の発展の歴史)では、200ページの教科書を使ったから本当に読みづらい
10 国費	マレーシア	男	工	17	化学基礎Ⅰ	試験に落ちた。勉強の仕方が悪かった。日本語能力の不足	化学(理系の教科書)
11 国費	マレーシア	男	工	20	専門科目、世界と日本	先生の話し方が早い、専門的な言葉がわからない、古い漢字とことばがわからない	漢字・専門のことばがわからない
12 国費	マレーシア	女	工	18	西洋の社会と歴史、概論の授業	先生の方言、先生が板書をせずに話す	化学
13 国費	マレーシア	女	工	19	数学・専門科目(化学工学)・主題科目	言葉の問題	専門科目
14 国費	マレーシア	女	工	15	化学工学序論、西洋文化の受容と変容	専門の言葉がわからない・黒板の字が読み取りにくい	科学基礎1, 3
15 国費	モロッコ	男	工	22	化学	先生の声が小さい・板書が読み取りにくい	歴史関係の本
16 国費	モロッコ	男	工	24	板書をノートしても理解できない科目	先生のはなし方が早い・黒板の字が読み取りにくい・専門の言葉がわからない	専門の教科書
17 国費	ラオス	男	工	19	世界と日本、科学と情報	わからない単語ばかりあったから	科学基礎1, 3・プログラミング
18 政府	タイ	女	工	17	先生がたくさんしゃべる授業。例えば歴史、工学概論	先生の話し方が早い。新しい単語や専門の言葉がわからない	歴史
19 政府	タイ	男	工	15	情報、化学	基礎知識が足りない	情報
20 政府	マレーシア	男	工	16	数学	先生が黒板にいっぱいものを書く	数学Ⅰ
21 政府	マレーシア	男	工	16	歴史関係(先生が板書しない科目)	先生の話し方が早い。板書が読みにくい、板書があっても理解が難しい	たくさん読めない漢字があって、言葉もわからない
22 政府	マレーシア	男	工	13	世界と日本、科学と情報	先生の話し方が早くて字が読みにくい、板書が多くて試験のとき困る	化学・専門科目・世界と日本・科学と情報

日韓理工系留学生の難しかった授業・教科書

1 日韓	韓国	女	工	18	都市文明と歴史	専門用語。学生が100人を超えているのにマイクがない	化学基礎
2 日韓	韓国	男	工	14	国際化と経済活動	先生の話し方が早い。黒板の字が読み取りにくい	
3 日韓	韓国	男	工	17	物理	授業がつまらなくて、寝てしまう	あまり本を読まなかった
4 日韓	韓国	男	工	17	化学	先生の話し方が早い。黒板の字が読み取りにくい	物理
5 日韓	韓国	男	工	17	化学基礎Ⅰ	先生が大阪弁だったので、聞きとりづらい	教養科目：手と脳
6 日韓	韓国	男	工	14	西洋文化の受容と	英語が多く出てくるが知っている名前でも日本語の発音なので内容がききとれない	歴史関係の本
7 日韓	韓国	男	工	17	生涯習慣病の予防と運動		化学(教科書自体が難しく、先生も使わずに講義した。試験前自分で読むのは難)
8 日韓	韓国	女	工	17	基本主題(現代思想の展	自分の能力・努力不足	化学
9 日韓	韓国	女	工	19	専門(建築史・図学など)基本主題科目「生涯健康とスポーツ」	専門の言葉がわからない	人文系の科目
10 日韓	韓国	男	工	17	日本の映画史	学生がうるさく、教師が怒って板書せずに話した為ノートをとるのが難	

私費留学生の難しかった授業・教科書

1	私費	中国	女	文	16	国際化と経済活動	具体的内容がなく、題目ばかり。	なし
2	私費	中国	男	文	11	日本の憲法、社会契約論	先生は板書しない。専門のことがわからない	社会契約論
3	私費	中国	男	文	12	論理学	名古屋弁で聞き取りにくい	論理学
4	私費	中国	男	文	13	生命の現象と本質、論理学	先生の字がわからない。板書がメチャクチャ	契約論
5	私費	中国	男	文	13	論理学	専門の言葉がわからない。教科書が厚すぎる	論理学
6	私費	中国	女	文	14	論理学	先生のはなし方も早いし、専門のことばもわからない	人文系の科目(日本語の表記法について)
7	私費	中国	女	情	15	専門科目	専門の言葉がわからない	基礎セミナー
8	私費	中国	女	情	15	全学共通科目のほとんど全部、特に聞き取りにくかったのは「地球科学」	専門の言葉がわからない	地球科学
9	私費	中国	女	法	15	専門科目	法政Ⅲ、Ⅱ:先生の話し方が早い、専門の言葉が多い	近現代史の金融の歴史に関する本が読みにくかった
10	私費	中国	男	経	17	現代経済Ⅱ、東洋文化の受容と変容源氏物語	話し方がとても早いし、量も多い。源氏物語は古文に知識がないので理解が難しい	特になし
1	私費	中国	男	農	18	生物実験・基礎セミナー	生物の知識不足	線形代数
2	私費	中国	女	農	20	世界と日本、化学	先生の話し方が早い。専門の言葉がわからない	生物:英語だったから
3	私費	中国	女	医	16			
4	私費	ベトナム	女	医	19	専門科目	専門用語の漢字	解剖生理学・微生物
5	私費	中国	男	理	17	地球科学基礎	先生の話し方が早い。専門の言葉がわからない。黒板の字が読み取りにくい	化学基礎Ⅰ:専門の言葉がわからない。辞書を調べても載っていない
6	私費	中国	男	理	18	基礎主題科目:世界と日本	先生の話が早く、ノートがとれない	物理
7	私費	中国	男	工	14	基礎主題科目、コンピュータ	板書がない、あっても簡単すぎる。コンピュータは専門の言葉がわからない	化学
8	私費	中国	男	工	15	生涯習慣病の予防と運動	内容が難	数学Ⅰ
9	私費	中国	男	工	15	計算機基礎数理・物理基礎Ⅰ	内容が難	化学工学
10	私費	中国	男	工	15	コンピュータリテラシー	専門の言葉が多い	基礎セミナー:カオスのエッセンス
11	私費	中国	男	工	16	国際化と経済活動	先生のノートがなく、授業内容を全部その場で言う。具体的内容がない。	なし
12	私費	中国	女	工	17	専門基礎科目B	先生の話し方が早い。黒板の字が読み取りにくい	教科書を読んで理解することはあまり難しくない。講義はよくわからないので、自分で教科書を読んで勉強する。
13	私費	中国	女	工	18	基本主題科目:環境と法、専門科目:図学、情報処理序説、化学基礎Ⅰ	専門のことばがわからない。先生のはなし方が早い。先生はほとんど黒板に字を書かない	情報処理序説、化学基礎Ⅰ、線形性と情報数理
14	私費	中国	女	工	16	基礎セミナー	植物に関する言葉が出てきたが、あまりわからなかった	あまりない